園長が障害児の保護者支援で抱いた困難感

－園長経験者を対象とした面接調査結果の分析－

岸　本　美　紀
武　藤　久　枝

研究紀要第 54 号　抜粋

岡 崎 女 子 大 学
岡崎女子短期大学

令和 3 年 3 月 15 日発行

【研究論文】

園長が障害児の保護者支援で抱いた困難感
－園長経験者を対象とした面接調査結果の分析－

岸本　美紀*　武藤　久枝**

要　旨

本研究は、園長が行う障害児の保護者支援の特徴について明らかにするため、5 名の園長経験者を対象に障害児の保護者支援で抱いた困難感に関する面接調査を行った。対象者の回答から、障害児の保護者支援の困難感に関する 28 個の 1 次カテゴリーを設定し、岸本他(2019b)の 2 次カテゴリーに従って分類した。その結果、「不信感・関係構築困難」、「伝え方・対応の仕方」、「保護者同士の関係」、「要求の強い保護者」、「保護者自身の問題」、「保育者自身の問題」に該当する 1 次カテゴリーが認められた。また、1 次カテゴリーの内容から、園の保育に対する要求や障害児の保護者と健常児の保護者の関係に対する園全体を掌握した対応、担任では対応が難しい保護者への対応など、園長による障害児の保護者支援の特徴がうかがえた。

キーワード：障害児の保護者支援、困難感、園長経験者、面接調査

Ⅰ．はじめに

岸本他(2019a)は、障害児の保護者支援について理解するため、平成 30 年「保育所保育指針解説」(2018)に示される内容 [1]から 1)「家庭との連携」に関した「①家庭への援助に関する計画」「②家庭への援助に関する記録」、2)「市町村や関係機関との協力」に関した「③かかりつけ医との連携」「④子ども理解や対応についてのプログラム紹介」「⑤保健センター等との連携」「⑥児童発達センター等専門機関からの助言」、3)「就学」に関した「⑦保護者の意向の受け止め」「⑧就学先との連携」、4)「他の子どもや保護者に対して」に関した「⑨保育所としての方針や取組み等の説明」「⑩障害に対する正しい知識や認識のための配慮」の 10 項目を取り上げ、先行研究から実践内容を把握した [2]。その結果、「①家庭への援助に関する計画」、「③かかりつけ医との連携」、「④子ども理解や対応についてのプログラム紹介」以外の 7 項目について実践内容を把握することができた [3]。そして、岸本他(2020)では、岸本他(2019a)[4]の 10 項目について、園長経験者の面接調査結果から実態を把握することを試みた [5]。その結果、「②家庭への援助に関する記録」、「⑤保健センター等との連携」、「⑥児童発達センター等専門機関からの助言」、「⑦保護者の意向の受け止め」、「⑧就学先との連携」、「⑨保育所としての方針や取組み等の説明」、「⑩障害に対する正しい知識や認識のための配慮」が、岸本他(2019a)[6]と同様に実際に実践されていることが明らかとなった [7]。また、岸本他(2019a)[8]で把握できなかった「③かかりつけ医との連携」、「④子ども理解や対応についてのプログラム紹介」の実践内容を把握できた [9]。

加えて岸本他(2020)では、障害児の保護者支援における困難感について園長経験者の回答から分析を行った [10]。結果からは、園の対応への保護者の不満、障害受容ができていない保護者への対応、健常児の保護者との関係などに園長として困難感を抱いていたことが示唆された [11]。また、「園長になってから、子どもの細かい状況を保護者に説明できない」など、障害児の保護者支援の内容について園長としての見解がうかがえたことから、職階や立場の違いによって保護者支援の困難感の内容が異なる可能性が推察された [12]。

岸本他(2020) [13]では、障害児の保護者支援の内容や園長経験者が抱く困難感を具体的に明らかにすることができたが、困難感の特徴や園長が行う支援の特徴まで把握することはできなかった。そこで本研究では、岸本他(2020)[14]で職階によって困難感の内容が

*岡崎女子大学　　**中部大学

異なることが示唆されたことを踏まえ、園長経験者の回答内容を岸本他(2019b)[15]で示された保育者が保護者支援で抱く困難感（以下、「保育者困難感」）に従って分類を試みる。それによって、「保育者困難感」と園長が障害児の保護者支援で抱く困難感（以下、「園長困難感」）との比較が可能となると考える。以上から本研究の目的は、園長が障害児の保護者支援で抱く困難感を把握することで、園長が行う障害児の保護者支援の特徴について明らかにすることである。

Ⅱ．研究方法

１．対象

個人的に依頼を行った園長を経験した女性5名である。保育歴の平均は39.4年であった。

詳細については、岸本他(2020)[16]において既に報告した。

２．方法

（1）調査方法

園長経験者に対して、障害児の保護者支援に関する半構造化面接を個別に行った。

詳細については、岸本他(2020)[17]において既に報告した。

（2）分析方法

面接調査の逐語記録から、障害児の保護者支援について、園長経験者が困難感を抱いた支援内容に関する記述を整理し、分析を行った。

①1次カテゴリーの設定

逐語記録の内容を表すカテゴリー(以下、1次カテゴリー)を作成した。1人の回答者の逐語記録中に複数の意見が列挙されている場合は、それぞれ独立したものとして分類した。28個の1次カテゴリーを設定した。

②2次カテゴリーの設定

「園長困難感」の28個の1次カテゴリーについて、「保育者困難感」に関する記述から設定した岸本他(2019b)[18]の10項目の2次カテゴリーに従い、分類した。

③再分類化

面接調査の逐語録を読み直し、設定した2次カテゴリーに分類し直した。

３．倫理的配慮

面接調査は、平成30年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会の承認を得た（通知番号32）。また、対象者に対しては、研究の趣旨、個人情報の取り扱い等を説明し、同意書への記入を求めた。

Ⅲ．結果及び考察

１．園長経験者が障害児の保護者支援で抱いた困難感（「園長困難感」）

（1）面接調査結果の分析と分類

逐語記録から28個の1次カテゴリーを抽出し、岸本他(2019b)[19]の「保育者困難感」に関する10項目の2次カテゴリーに従って分類した。結果を表1に示す。

表1　岸本他(2019b)の困難感2次カテゴリーに対応する本研究の1次カテゴリー数

数字は1次カテゴリー数（出現率）

岸本他(2019b)の2次カテゴリー	1次カテゴリー数(%)		
	岸本他(2019b)	岸本他(2019c)	**本研究**
①自己中心的な保護者	12（12.6）	18（22.0）	0（0.0）
②伝え方・対応の仕方	12（12.6）	18（22.0）	7（25.0）
③保護者の養育態度	22（23.2）	13（15.9）	0（0.0）
④不信感・関係構築困難	10（10.5）	13（15.9）	13（46.4）
⑤要求の強い保護者	11（11.6）	11（13.4）	2（7.1）
⑥保護者自身の問題	12（12.6）	6（7.3）	1（3.6）
⑦保護者同士の関係	2（2.1）	2（2.4）	4（14.3）
⑧園内の要因	4（4.2）	1（1.2）	0（0.0）
⑨保育者自身の問題	8（8.4）	0（0.0）	1（3.6）
⑩子どもの問題	2（2.1）	0（0.0）	0（0.0）
合計	95（100.0）	82（100.0）	28（100.0）

1 次カテゴリー数が多い順に、「不信感・関係構築困難」(13 個)、「伝え方・対応の仕方」(7 個)、「保護者同士の関係」(4 個)、「要求の強い保護者」(2 個)、「保護者自身の問題」(1 個)、「保育者自身の問題」(1 個)であった。岸本他(2019b)[20]で挙げられた「自己中心的な保護者」、「保護者の養育態度」、「園内の要因」、「子どもの問題」に該当する 1 次カテゴリーはなかったため、本研究で認められた 2 次カテゴリーは 6 項目となった。

先行研究から「保育者困難感」を分析した岸本他(2019b)[21]と現職保育者の回答から「保育者困難感」を分析した岸本他(2019c)[22]を比較すると、岸本他(2019c)では「保育者自身の問題」、「子どもの問題」が出現していなかったが[23]、出現率において大きな差がある 2 次カテゴリーは見受けられない。本研究は「不信感・関係構築困難」が約半数を占め、「保護者同士の関係」が 3 番目に出現率が高いなど、「保育者困難感」に関する岸本他(2019b)[24]と岸本他(2019c)[25]とは、出現率についてやや異なる傾向がうかがえる。

(2) 2 次カテゴリーの内容

本研究で出現が認められた 1 次カテゴリーに対応する岸本他(2019b)[26]の 2 次カテゴリー、およびそれに対応する 1 次カテゴリーの抜粋を表 2 に示す。表 2 は、先行研究の記述から「保育者困難感」を分析した岸本他(2019b)[27]、現職保育者の回答から「保育者困難感」を分析した岸本他(2019c)[28]の 1 次カテゴリーの抜粋も示すことで、比較を試みる。

1)「伝え方・対応の仕方」

「子どもの障害を認めたくない保護者への対応」、「子どもの障害を隠したい保護者には、言葉選びに気を遣った」などの 1 次カテゴリーが設定された。入園前や保護者の子どもの受け止めの状況によって、園長が対応やかける言葉に配慮している様子がうかがえる。「保育者困難感」を把握した岸本他(2019c)では、1 次カテゴリーの出現率が最も高く(22.0%)[29]、「障害児困難感」を把握した本研究でも 2 番目に高い出現率(25.0%)であった。このことから、子どもの障害の有無にかかわらず、保育者が保護者への伝え方や対応の仕方に困難感を抱くことがうかがえる。

飯村他(2012)では、障害児保育にあたり保育士が困難を感じている内容を分類し、「保護者との関わりや対応に関すること」を挙げているが、その中には、子どもの障害を受け入れられない保護者と連携が取れないこと、子どもの様子を保護者と話し合うこと、保護者とのコミュニケーションなどに困っている内容が含まれている[30]。保護者が子どもの障害を受け止めているかどうかの影響も推察されるが、本研究でも園長が保護者の状況などを配慮しながら、子どもの様子を伝えることや話す内容、対応の仕方などに苦慮していることがうかがえる。岸本他(2019c)では、「障害をもつ子どもの保護者への伝え方」が 1 次カテゴリーに設定されたが[31]、本研究の 1 次カテゴリー数からも、障害児の保護者に伝えることや対応について保育者が困難感を抱くことが推察される。

また、家庭との連携について保育所を対象に質問紙調査を行った石川他(2016)では、担任が行っている家庭との連携に対して保育園長[注(1)]がどの程度助言や介入をするのか尋ねている[32]。園長の助言や介入は、「担任だけでは対応できないような苦情や相談」など困難事例などで、組織としての対応や担任の状況に配慮して行われていることが示唆されている[33]。このようなことから、園長が難しい保護者に対応していることが、本研究の結果にも影響しているのではなかろうか。

2)「不信感・関係構築困難」

「心を開いてもらうまでに時間がかかる」、「予想と異なり、保護者が子どもの障害の受け止めができていなかった」などの 1 次カテゴリーが設定された。子どもの捉え方について園長と保護者との相違があったり、保護者から援助について不信感を持たれたりするなど、関係が構築しづらい状況にあったことがうかがえる。1 次カテゴリー数は本研究と岸本他(2019c)では 13 項目と同じであったが、出現率は本研究が 46.4%、岸本他(2019c)が 15.9%であり[34]、本研究の出現率の高さがうかがえる。この結果から、障害児の保護者支援ではとりわけ関係構築に困難感を抱くことが推察される。

軽度発達障害があると思われる子どもの指導において、幼稚園、小学校、中学校の教師が日々の教育活動の中で困難を感じていることについて分析した栗原他(2004)によると、「保護者との関係づくりについて」が 3 番目に回答者が多いカテゴリーであった[35]。

本研究の 1 次カテゴリーからは、子どもの認識について園長と保護者の間に相違がある場合、共通理解を得ることが難しいことがうかがえる。保護者と保育者との間の子ども理解の相違については、飯村他(2012)からも保護者との関わりや対応に関する困難につな

表 2　岸本他(2019b)の困難感 2 次カテゴリーに対応する岸本他(2020)と本研究の 1 次カテゴリーの抜粋

2 次カテゴリー	1 次カテゴリーの抜粋		
	岸本他(2019b)	岸本他(2019c)	本研究
	分析対象		
	保護者支援の困難感に関する先行研究の記述	保護者支援の困難感に関する現職保育者の回答	障害児の保護者支援の困難感に関する園長経験者の回答
①自己中心的な保護者	・自己中心的な発言が多い ・自己中心・モラルの欠如	・時間にルーズ ・なかなか連絡がとれない	
② 伝え方・対応の仕方	・保護者への伝え方 ・相談に対する回答	・どこまで伝えたらいいか ・障害をもつ子どもの保護者への伝え方	・子どもの障害を認めたくない保護者への対応 ・子どもの障害を隠したい保護者には、言葉選びに気を遣った
③保護者の養育態度	・子どもや保育に無関心な保護者 ・基本的な育児やしつけができない	・家庭で対応してくれない ・園任せにならないでほしい	
④ 不信感・関係構築困難	・保育士への不信感 ・保護者から信頼されない	・保護者に心配、不信感をもたれていたのでは	・心を開いてもらうまでに時間がかかる ・予想と異なり、保護者が子どもの障害の受け止めができていなかった
⑤要求の強い保護者	・園に要求や不満が多い ・要求がエスカレートする	・要求が強い ・結構サービスを求めてくる	・たくさん子どもがいる中で、「ちゃんと子どもを見てくれているの」と言われた ・保育園でやってほしいと言われるが、できない
⑥保護者自身の問題	・保護者自身が心身の病気 ・外国籍の保護者等言葉上の問題	・心配性 ・外国籍 ・心の病	・両親が発達障害
⑦保護者同士の関係	・保護者同士の関係がうまくできない ・保護者間のいざこざ	・保護者同士が子どもを関わらせないでほしいと言った	・健常児の保護者に対応を理解してもらうこと ・保護者同士の関係が上手くいかなくなる
⑧園内の要因	・上司がなかなか力を貸してくれないこと ・保育士業務の複雑化・多忙化	・園の姿勢をどう打ち出していくか	
⑨保育者自身の問題	・若く、子育て経験のない自分が保護者対応をすること ・対応する時間がない		・園長になってから、子どもの細かい状況を保護者に説明できない
⑩子どもの問題	・子どもをめぐる問題 ・子どもが発達障害や問題行動を抱えている		

がることがうかがえる[36]。保育者へのインタビュー調査結果から障害児の育ちにおける保育所の役割について分析した植田他(2016)では、障害児保育の課題のサブカテゴリーに「子どもの障害に対する家族との認識の差、理解の差」が挙げられている[37]。また、岸本他(2019c)において「不信感・関係構築困難」に設定された1次カテゴリーに「子どもの障害を認めない」があった[38]。以上から、障害児においても、園長と保護者との間に生じる子ども理解や障害の受け止めについての相違は、保護者支援における困難感につながることがうかがえる。加えて、石川他(2016)で示唆されたように[39]、園長は、立場上対応が難しい保護者に対応している状況が影響しているのではなかろうか。

3)「要求の強い保護者」

1次カテゴリー「たくさん子どもがいる中で、『ちゃんと子どもを見てくれているの』と言われた」、「保育園でやってほしいと言われるが、できない」が設定された。1次カテゴリー数2個、出現率は7.1%であり、岸本他(2019c)の結果(1次カテゴリー数11個、13.4%)[40]と比較すると、出現率が低かった。保育者としては障害児を見ているが、もっと見てほしいという保護者の要望や保育者の専門性では難しい対応を求められるなど、園の実情では難しい対応を保護者から求められていることに園長が困難感を抱くことが推察される。

村田他(2010)では、発達障害児の養育者が望む支援について質問紙調査を行い、分析した結果、幼児期から就学前に支援のニーズが高いこと、就学前の子どもをもつ養育者では療育の充実と保育所・幼稚園の支援への希望が多かったことが明らかとなった[41]。このような養育者の支援ニーズの高さが、園への要望として強く示される可能性があるのではなかろうか。

また、岸本他(2019b)[42]と比較して、出現率が低かったことについては、本研究の対象者数が少ないことによる1次カテゴリーの少なさの影響が考えられる。しかし、障害児が保育所や幼稚園に入園する際には、何らかの条件が設定されたり、面接で入園を断られたりすることもある。このような状況では、子どもを園で受け入れてもらうため、保護者が園に遠慮し、要求しづらい状況につながるのではなかろうか。どのようなことが影響を与えるのか、本研究だけの結果なのか、今後詳細な検討が必要である。

4)「保護者同士の関係」

1次カテゴリー「健常児の保護者に対応を理解してもらうこと」、「保護者同士の関係が上手くいかなくなる」など4項目が設定され、出現率は14.3%であった。1次カテゴリー数は少ないが、健常児の保護者と障害児の保護者との関係が、園長の困難感となる可能性がうかがえる。

平成30年度「保育所保育指針解説」(2018)では、健常児の保護者に対して、保育所としての方針や取り組み等について丁寧に説明することや必要に応じて障害に対する正しい知識や認識ができるように配慮することが求められている[43]。これらの取り組みについては、岸本他(2019a)、岸本他(2020)で、園便りで障害児への支援に関する園の方針を伝えたり、保護者の希望があれば説明する機会を設定したりするなど、具体的な実践例が挙げられている[44][45]。しかしながら、実際には他の保護者からの要求や苦情が出ることがあり、園長の困難感となることが推察される。石川他(2016)では、保育園長が担任の家庭との連携に対して助言や介入することについて、組織としての対応と受け取れる記述が多かった[46]。このことから、園長が園全体の問題として、障害児の保護者と健常児の保護者を仲介したり、園の方針を示したりしていることの影響が推察される。

5)「保護者自身の問題」

1次カテゴリー「両親が発達障害」が設定され、出現率3.8%であった。保護者も発達障害があることで、情報を得ることや伝える際などにおいて、配慮が必要となることが挙げられていた。

6)「保育者自身の問題」

1次カテゴリー「園長になってから、子どもの細かい状況を保護者に説明できない」が設定され、出現率3.6%であった。園長として保護者に説明をしたり、相談を受けたりすることがあるが、実際に子どもと関わる機会が減るため、子どもの情報を得ることに苦慮していたことがうかがえる。

7) 1次カテゴリーが出現しなかった2次カテゴリー

本研究で1次カテゴリーが出現しなかった岸本他(2019b)[47]の2次カテゴリーについて取り上げる。2次カテゴリー「自己中心的な保護者」、「保護者の養育態度」、「園内の要因」、「子どもの問題」は、該当する1次カテゴリーがなかった。

園長経験者の経験上、個別の事例では養育態度に問題がある保護者がいたり、園内の問題があったりした可能性が考えられる。しかし、本研究は保育歴の長い園長経験者5名の回答を分析したため、詳細な事例についての回答は少なかった。このような本

研究の研究方法や対象者の要因が影響を与えていることが推察される。

現職保育者の回答から「保育者困難感」に関する記述を分析した岸本他(2019c)では、「自己中心的な保護者」の 1 次カテゴリーの出現率が最も高く、「保護者の養育態度」は出現率が 2 番目に高かった[48]。しかし、2 つの 2 次カテゴリーともに本研究では 1 次カテゴリーが認められなかった。本研究は対象者が 5 名と少なく、1 次カテゴリー数も 28 項目であったことの影響が推察される。しかし、岸本他(2019c)[49]と出現率の差が大きいことから、障害児が入園する過程や療育の経験、保護者の特徴など、影響を与える要因について今後詳細な検討が必要である。障害児の保護者の場合、入園にあたって方針や条件があることにより子どもを受け入れてもらうために気を遣ったり、入園前の療育により子どもへの適切な関わり方を学んだりしている点も影響しているのではなかろうか。

「子どもの問題」は、岸本(2019b)では「子どもが発達障害や問題行動を抱えている」などが 1 次カテゴリーとして設定されている[50]。本研究では、障害児の保護者支援を分析していることから、「子どもの問題」に 1 次カテゴリーを設定しなかった。

Ⅳ．まとめと今後の課題

保育者が抱く保護者支援の困難感に関して岸本他(2019b)[51]が設定した 2 次カテゴリーに従い、園長が障害児の保護者支援で抱く困難感について、園長経験者の回答から分析を行った。その結果、出現率が高い順に「不信感・関係構築困難」、「伝え方・対応の仕方」、「保護者同士の関係」、「要求の強い保護者」、「保護者自身の問題」、「保育者自身の問題」では 1 次カテゴリーが認められたが、「自己中心的な保護者」、「保護者の養育態度」、「園内の要因」、「子どもの問題」は該当する 1 次カテゴリーが認められなかった。

本研究から、園長が困難感を抱いているのは、保護者への伝え方や関係構築、保護者同士の関係などであることが明らかとなった。1 次カテゴリーの内容からは、園の保育に対する保護者からの要求や障害児の保護者と健常児の保護者の関係などに対する園全体を掌握した対応、担任では対応が難しい保護者や困難事例への対応など、園長による障害児の保護者支援の特徴がうかがえた。

しかし、本研究は対象者が 5 名と少なく、この点が結果に影響していることが推察される。対象を広げても同様の結果になるのか、今後の検討が必要である。

注

（1）石川他（2016）では、保育所長としているが、本研究では保育園長とする。

付記

岸本：I〜IV

武藤：I〜IVについて、草稿執筆や重要な専門的な内容に関する校閲を行っている。

引用文献

1）厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』平成 30 年 3 月、p.335
2) 岸本美紀・武藤久枝 (2019)「障害児の保護者支援の内容に関する検討　―保育所保育指針の分析から―」『日本保育学会第 72 回大会発表論文集』、pp.647－648
3) 前掲 2)
4) 前掲 2)
5) 岸本美紀・武藤久枝 (2020)「障害児の保護者支援に関する面接調査(1)　―園長経験者を対象とした予備調査―」『日本保育学会第 73 回大会発表論文集』、pp.1049－1050
6) 前掲 2)
7) 前掲 5)
8) 前掲 2)
9) 前掲 5)
10) 前掲 5)
11) 前掲 5)
12) 前掲 5)
13) 前掲 5)
14) 前掲 5)
15) 岸本美紀・武藤久枝 (2019) 「保育者が保護者支援で抱える困難感の内容と構造　―先行研究の分析から―」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第 52 号、pp.39－46
16) 前掲 5)
17) 前掲 5)
18) 前掲 15)
19) 前掲 15)
20) 前掲 15)

21) 前掲 15)
22) 岸本美紀・武藤久枝 (2019) 「保護者支援の困難感に関する保育者への面接調査の分析」『中部大学現代教育学研究紀要』第 13 号、pp.25－32
23) 前掲 22)
24) 前掲 15)
25) 前掲 22)
26) 前掲 15)
27) 前掲 15)
28) 前掲 22)
29) 前掲 22)
30) 飯村敦子・小林芳文・竹内麗子・吉村喜久子 (2013) 「障害のある子どもの生きやすさを支える支援に関する研究」『保育科学研究』第 3 巻（2012 年度）、pp.75－98
31) 前掲 22)
32) 石川昭義・矢藤誠慈郎・森俊之・青井夕貴・西村重稀・鈴木智子・舘直宏 (2016) 「保育所と家庭との連携に関する研究」『保育科学研究』第 6 巻（2015 年度）、pp.1－21
33) 前掲 32)
34) 前掲 22)
35) 栗原輝雄・長谷川哲也・藪岸加寿子・植谷幸子 (2004) 「軽度発達障害があると思われる子どもに対する集団の中での指導について―津市立教育研究所主催の研修会に参加した教師へのアンケート調査から―」『三重大学教育実践総合センター紀要』第 24 号、pp.21－28
36) 前掲 30)
37) 植田紀美子・後藤あや・山崎嘉久 (2016) 「障害児の育ちにおける保育所の役割―インタビュー調査法による検討―」『小児保健研究』第 75 巻第 3 号、pp.398－405
38) 前掲 22）
39) 前掲 32)
40) 前掲 22)
41) 村田絵美・山本知加・加藤久美・福田祥子・毛利育子・永井利三郎・谷池雅子 (2010) 「発達障害児の養育者が求める支援　～堺市質問紙調査より～」『小児保健研究』第 69 巻第 3 号、pp.402－414
42) 前掲 15)
43) 前掲 1)
44) 前掲 2)
45) 前掲 5)
46) 前掲 32)
47) 前掲 15)
48) 前掲 22)
49) 前掲 22)
50) 前掲 15)
51) 前掲 15)

謝辞

本研究にご協力いただきました園長経験者の皆様に、心からお礼申し上げます。